

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	里地里山の特性評価の実施とこれに応じた保全活用の実施
手法名	地元との連携による湿地生物(アベサンショウウオ)保全を軸とした湿地生態系の再生手法
主体	水辺と生き物を守る農家と市民の会
背景(地域の課題)	絶滅危惧種の保全は、種に見合ったきめ細かな保全対策が特に必要とされる。一方で、特定の種に偏らない里地里山全体の生態系に配慮した保全の方向性をも見据えて取り組んでいくことも求められる。
手法／方策の詳細	<p>絶滅危惧種に選定されているアベサンショウウオの保護には、下記の基本的考え方と保全対策が必要である。</p> <p>1) 里地里山の自然再生の考え方 ① 国外や国内のほかの地域から外来種を持ちこまない。 ② それぞれの地域に固有な種の多様性を保全する。 ③ 遺伝的多様性を維持する。 ④ 自然の回復力を活かす。 ⑤ 外来種を駆除する。</p> <p>2) アベサンショウウオ保全再生の進め方 ① 保全目的と目標を明確にする。 ② 地形・地質や水条件から増殖に適合しそうな箇所を選定し、生息環境の条件を整える。 ③ 自然の回復力を活かす ④ 保全再生状況の経過を見ながら検討。景観を重視し、無理に人手を加えず、順応的・継続的管理を心がける。</p> <p>3) アベサンショウウオ産卵地整備の留意点(図) ① 地権者と協働で整備する。 ② 幼生変態期間(7月まで)に水を十分確保する。 ③ 流出防止の淵や堰などを造成する。 ④ 谷津田(谷田)の奥から整備する。山麓縁から3mまでの止水湿地造成・土水路整備が必要。 ⑤ 水深は10cmまでとする。ただし、土砂が流入し浅くなることが想定される場合は余裕をみて20~30cmを確保する。 ⑥ 湧水口や雨露等、水が染みだす場所は残す。 ⑦ 落ち葉を除去し裸地土水路には産卵被付着物投入や隠れ場所を造成する。 ⑧ アメリカザリガニ駆除、イノシシ・アライグマ対策(粗朶・竹枝や笹を投入) ⑨ 短い期間、狭い範囲の整備を数多く行う(人手による生物への影響を極力なくす)。 ⑩ 適時の点検とメンテナンスが必要(時期・時間帯に配慮する)。 ⑪ 作業時、発見幼生・卵嚢・成体は近接の同じ水系へ移動する。 ⑫ アベサンショウウオの低温火傷防止に配慮する(長時間手に持たない。)</p>
手法・技術的視点	里地里山の自然再生、希少種の保全再生、フィールド整備の在り方といった、全体方針から個別の対策に至る各項目ごとの留意点が整理されている。本事案のアベサンショウウオだけでなく他の希少種等の保護保全においても示唆に富む論点整理手法だと考えられる。
	<p>図 越前市におけるアベサンショウウオ産卵地</p>
参考資料	里なび研修会in福井 環境省希少野生動植物種保存推進員 長谷川 巖